

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典ヘブライ語の動作動詞における目的語表現についての一考察 (2)
Author(s)	三上, 宗一
Citation	ニダバ , 26 : 50 - 58
Issue Date	1997-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048013">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048013</a>
Right	
Relation	



## 古典ヘブライ語の動作動詞における 目的語表現についての一考察(2)\*

三 上 宗 一

### 0. はじめに

古典ヘブライ語では動詞の目的語として一般に次の形式が認められている。

- (a)  $\phi$  - NP<sub>indet</sub> (NP<sub>indet</sub> = 非限定名詞句)  
 (b) 'et - NP<sub>det</sub> (NP<sub>det</sub> = 限定名詞句)

ただし、限定名詞句の場合であっても 'etの使用は決して義務的でなく、特に韻文においては現れない場合が多い。本稿では仮にこれらの形式をMuraoka(1979)の用語にならない、bare object と呼称しておくこととする<sup>1)</sup>。

これらと並び、目的語の位置に前置詞句が出現している場合もある<sup>2)</sup>。

- (c) Prep - NP (Prep = b<sup>e</sup>-, l<sup>e</sup>- ...)

以前、拙論(1995)において、上の(a)~(c)の形式を全て有する動詞の中から若干数の動作動詞を選び、その分布を決定づける要因について(1)名詞句の素性、(2)文全体の意味の2点を重点的に取り上げながら論じたことがあった。その際に動作動詞を選んだのは、動作対象に具体物が多く、行為の性質を客観的に把握しやすいという利点を持つからである<sup>3)</sup>。本稿でもこの観点を踏襲し、以前十分に扱えなかった他の動詞の分析も加えていきながら若干の補足を行いたい。よって本稿は、拙論(1995)を補完するものとして見ていただければ幸いである。

### 1. 'āḥaz (Qal)

動詞 'āḥazは、「つかむ、つかまえる」等の意味を有し、対象はbare objectか、あるいは b<sup>e</sup>- (at)を用いた前置詞句で表現される。目的語の名詞句に注目すると、前置詞句はつかむ対象の一部を特定化する際に使用され、bare object、特に 'et句は対象全体が目的語の場合に使用されることが多い。詳細は拙論(1995)参照のこと<sup>4)</sup>。ここでは例文を挙げておくにとどめる。

1) be'ēhōz 'ōtō p<sup>e</sup>lišṭīm b<sup>e</sup>gāt

in-catching Acc-him Philistines at-Gat

パレスチナ人が彼(ダビデ)をガトで捕らえた時に

(Ps.56:1)

2) *wattōhez yad yemîn yô' āb bizqan 'āmāsā' ...*

and-caught hand right Joab at-beard Amasa

そしてヨアブの右手はアマサの口ひげをつかんだ。

(2Sm.20:9)

2)における動作が具体的な動作を表すのに対し、1)の動作は具体的とは言えず、「彼」がどのようにして拘束されているのかはこの文だけからは伺い知ることができない。

## 2. *tāpaś* (Qal)

この動詞は *'āḥaz* に近い意味（「つかむ、捕らえる」）を持つ。動作対象をその形態ごとに分類すると、次のようになる。なお、 $\phi$ -NP の場合における大かっこ [ ] は、述語動詞が分詞のため、それと属格的関係に立っている事例を表す<sup>5)</sup>。

$\phi$ -NP : *šēm 'ēlōhāy* 我が神の名 (Pr.30:9), [*dōr<sup>e</sup>ke qāšet* 弓を引く者 (Jr.46:9), *hammilḥāmāh* 戦 (Nu.31:27), *haqqešet* 弓 (Am.2:15), *hattōrāh* 律法 (Jr.2:8), *ḥārābōt* 剣 (Ez.38:4), *kinnōr* 豎琴 (Gn.4:21), *maggāl* 鎌 (Jr.50:16), *māgēn* 盾 (Jr.46:9), *m<sup>e</sup>rôm gib'āh* 小高い丘 (Jr.49:16), *māsōt mallāḥim* 船乗りの櫂 (Ez.27:29)]

'et-NP : *'āgāg* アガグ (1Sm.15:8), *'āmašyāhū* アマツヤ (2K.14:13, 2C.25:23), *bēt yiśrā' ēl* イスラエルの家 (Ez.14:5), *hammeleḳ* 王 (2K.25:6, Jr.52:9), *hassela* セラ (2K.14:7), *hā'ir* 都市 (Jo.8:8), *yirm<sup>e</sup>yāhū* エレミヤ (Jr.37:13), *meleḳ hā'ay* アイの王 (Jo.8:23), *n<sup>e</sup>bi' ē habba'al* バアルの予言者 (1K.18:40)...<sup>6)</sup>

Prep-NP : *'āḥiw* 彼の兄弟 (Is.3:6), *ḥasalmāh ḥaḥādāšāh* 新しい衣服 (1K.11:30), *hāreb* 剣 (Ez.30:21), *yirm<sup>e</sup>yāhū* エレミヤ (Jr.37:14), *š<sup>e</sup>nē halluhōt* 二つの石板 (Dt.9:17)...

この動詞は *'āḥaz* と異なり、bare object が多く前置詞句が少ない。（前置詞は主に *b<sup>e</sup>-* が用いられる。）また、*yirm<sup>e</sup>yāhū* のように両方で現れる語句が存在する一方、*'āḥaz* のように、特に前置詞句で対象の一部分を特定化する言い方は普通でない。

しかし、bare object は人物や都市を対象とする時に、前置詞句は手でつかむことのできる物体などを対象とする時にそれぞれ用いられやすいという傾向は指摘できる。では両者に共通する「人物」が目的語の場合、両構文の使い分けはどのようなものだろうか。

3) *wayyitpōś 'et 'āgāg meleḳ 'āmālēq ḥāy*  
and-arrested(3.sg.m.) Acc Agag king Amaleq alive

そして彼はアマレクの王アガグを生け捕りにした。

(1Sm.15:8)

4) *wayyitp<sup>e</sup>śū 'et hammeleḳ wayya'alū 'ōtō 'el meleḳ bābel riblātāh*  
and-arrested(3.pl.f.) Acc the-king

そして彼らは王を捕らえ、リブラのバベルの王の許へと連れ登った。

(Jr.52:9)

5) wayyitpōs yir' iyyāh beyirm<sup>e</sup>yāhū way<sup>e</sup>bi' ēhū 'el haśśārim

and-seized Jirija at-Jeremia

そしてイルイヤはエレミアを捕らえ、役人たちの所へ連行した。(Jr.37:14)

6) w<sup>e</sup>taḫ<sup>e</sup>sū bō 'ābīw w<sup>e</sup>immō w<sup>e</sup>hōsī'ū 'ōlō 'el ziqnē 'irō...

and-seize at-him father-his and-mother-his

そして彼の父母は彼を捕らえ、町の長老たちの許へつきだすように。(Dt.21:19)

3)と4)が 'et句、5)と6)が前置詞句を取る例である。これ以外の例も含めて検討してみると、まず、「生け捕りにする」意味では専ら 'et句が用いられているが、それ以外の場合には両者の差は微妙である。ただ、特に捕らえた後に連行する文脈が続いている事例を見ると、連行先が地名など遠方の場合には bare objectが、人の面前に連行する場合には前置詞句が使用されていることは示唆的であり、もし後者を相手の脇を「つかんで」連行する具体的な動作を表しているときとみた場合、より具体的な動作の場合に前置詞句が使用されやすいという 'āhazと類似の傾向が指摘できるのではないかと思われる<sup>7)</sup>。

### 3. rādaḫ(Qal)

動詞 rādaḫは「追跡する、追討する」の意味を持ち、動作対象としてbare objectか、あるいは前置詞 'ahārē(after) を伴った句を動作対象としてとることができる。この動詞の目的語を形態ごとに分類すると次の様になる。

φ-NP : 'ōy<sup>e</sup>bay 私の敵達(2S.22:38, Ps.18:38), 'āhīw 私の兄弟(Am.1:11), 'iš 'ōnī w<sup>e</sup> ebyōn 貧しい人(Ps.109:16), 'elep<sup>e</sup>千(Dt.32:30, Js.23:10), 'āšer hikkīla お前が打ち倒した者(Ps.69:27), haqqōrē' うずら(1S.26:20), ṭōb 幸い(Ps.38:21), mē' ah 百(Lv.26:8), naḫšī 私の命(Ps.7:6, 143:3), šedeq 義(Dt.16:20), r<sup>e</sup>bābāh 一万(Lv.26:8), šēkār 酒(Js.5:11), [š<sup>e</sup>dāqāh waḫāsed 義と優しさ(Pr.21:21), qādīm 東風(Ho.12:2), šalmōnīm 贈り物(Is.1:23)]

'et-NP : 'ōy<sup>e</sup>bēkem お前たちの敵(Lv.26:7), sis<sup>e</sup>rā' シセラ(Ri.4:22), (haḫ)p<sup>e</sup>lištim フィリスティア人(1S.7:11, 17:52), qaš yābēš 乾いたもみがら(Hi.13:25)

Prep-NP : 'ābōtēkem お前たちの父祖達(Jo.24:6), 'abnēr アブネル(2S.2:19, 24), 'ōy<sup>e</sup>bēkem お前達の敵達(Jo.10:19), b<sup>e</sup>nē ya 'āqōb ヤコブの息子達(Gn.35:5), [b<sup>e</sup>nē] yiśrā' ēl イスラエル人(Ex.14:8, Jo.8:17, 2S.2:28, 18:16), dāwid ダビデ(1S.23:25, 28, 2S.17:1), hā' amāšim その男達(Gn.44:4), hagg<sup>e</sup>dūd hazzeh この隊列(1S.30:8), hammelek 王(2K.25:5, Jr.52:8), hārekeb 戦車(Ri.4:16), hārōšēah 殺人者(Dt.19:6), zebaḫ w<sup>e</sup>šalmunā' ゼバハとツァルムナ(Ri.8:5), y<sup>e</sup>hōšua' ヨシュア(Jo.8:16), yārob'am ヤロブアム(2C.13:19), midyān ミディアン人(Ri.7:23, 25), mī 誰(1S.24:15), na' amān ナアマン(2K.5:21), 'abdō 彼の奴隷(1S.26:18), šeba' シェバ(2S.20:7, 10, 13)

前置詞は大部分 'ahārê (after) が用いられている。ここでのbare object と前置詞句の違いについては、'āhazのような全体一部分の関係は成立していないが、人物については tapas同様両者に共通している。

7) ur<sup>e</sup>daḥṭem                    'et 'ōy<sup>e</sup>bēkem    w<sup>e</sup>nāḥ<sup>e</sup>lū liḥnēkem lehāreb  
and-pursue(2.pl.m.) Acc enemies-your

そしてお前たちは敵を追い、彼らは面前で剣により倒れる。 (Lv.26:7)

8) wayyird<sup>e</sup>ḥū yō'āb wa'ābīšay    'ahārê 'abnēr w<sup>e</sup>haššemeš bā'āh  
and-pursued Joab and-Abishai after Abner and-the-sun set

そしてヨアブとアビシャイはアブネルの後を追ったが、日没になり... (2S.2:24)

8)のような前置詞句は主に追跡する場面において、7)のようなbare object はそれに加えて討伐する場面においてそれぞれ用いられる場合が多いようである。このような目的語の分布はどのように考えればよいであろうか。

ひとつには、例文にもあるように、追跡する行為それ自体は必ずしも相手への到達を含意しないのに対し、討伐は相手において初めて成立する行為であるということが指摘できる。そこで仮に対象への動作の影響の到達というパラメーターがかかっていると見た場合、影響の到達度の高い方に bare object が用いられているのは、他動性の観点からも自然であるとみることができる。逆に影響の到達度の少ない方は、被動者性が少なくなる分より自律性が感じられることにもつながる。この点 bare object には複数名詞や集合的な意味の名詞句が多いのに対し、前置詞句には固有名詞など特定された人物が多く出現するのは示唆的で、対象が自律的に移動する「後を」追い掛けるという意味がそれだけ鮮明になる。そのため、対象が自律性を持って移動しなければ、たとえ個人名であっても前置詞句は使用されない<sup>8)</sup>。

9) w<sup>e</sup>hinnēh    bārāq rōdēḥ                    'et sīs<sup>e</sup>rā'    wattēšē'    yā'ēl liqrā' tō  
and-behold Baraq pursuing Acc Sisera

すると見よ、バラクがシセラを追跡している。そこでヤエルは彼を迎えるために出てきた。 (Ri.4:22)

この文は、単独の人物名が唯一 'et句で出て来る例であるが、ここでの追跡対象の「シセラ」は、実は直前の文脈でヤエルに殺されている。殺した直後のヤエルが、シセラの死体をバラクに見せるためにバラクの前に出てきた場面である。ここでバラクはおそらく消えたシセラを捜して移動してただけであり、もしここで前置詞句を用いれば、逃げるシセラの「後を」追い掛ける意味になってしまうため、あえて前置詞句の使用が避けられたのではなかろうか。類似の例が少ないため断言はできないが、少なくともそのように考えれば、討伐する文脈で 'ahārê (after) を用いた前置詞句が使用しにくいことも同様に考えることができる。自律的な移動の含意が生じる 'ahārê を用いた前置詞句は、一方的な討伐の相手の表現としてはそぐわないことは容易に想像できる。

4. 'ākal (Qal)

この動詞の目的語はbare object が大部分であり、一部 min や b<sup>e</sup>-などを伴った前置詞句も用いられる。詳細は拙論(1995)を参照のこと”。これまでの3つの動詞と異なり、動作対象は無生物が主である。

10) mipp<sup>e</sup>ri 'ēs haggān nō' kēl  
 from-fruit tree the-garden eat(1.pl.)  
 園の木の実から我々は食べる。 (Gn.3:2)

11) wilīd bētō hēm yō' k<sup>e</sup>lū b<sup>e</sup>lahmō  
 and-child house-his they eat at-bread-his  
 そして彼の家の子供はかれのパンにあずかる。 (Lv.22:11)

ここでの min や b<sup>e</sup>- は一般にpartitive として記述される。ここでは目的語の形式的な相違は、食べる動作が対象の全体に及ぶものであるか、それとも部分的なものに留まるものであるかを規定しているとみられ、前述の動詞 'ahaz や tāpaś との類似が指摘できるが、rādaḅ のように対象の自律性等の意味論的性質が関与しているとはみなし難い。

5. rāgam (qal)

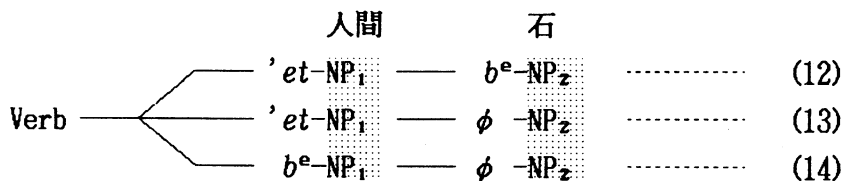
rāgam は「石撃ちにする。」という意味の動詞であるが、類義の動詞の sāqal (Qal) と異なり<sup>10)</sup>、目的語として石と人間の双方を取ることができる。

12) ur<sup>e</sup>gāmihū kol 'anšē 'irō bā' ābānim wāmēt  
 and-stone-him all men city-his by-stones  
 そして町中の人間が彼を石で撃ち殺し、そして彼は死ぬ。 (Dt.21:21)

13) wayyirg<sup>e</sup>mū 'ōtō kol yiśrā' ēl 'eben  
 and-stoned Acc-him all Israel stone  
 そして全イスラエルは彼を石撃ちにした。 (Jo.7:25)

14) wayyirg<sup>e</sup>mū kol yiśrā' ēl bō 'eben wayyāmōt  
 and-stoned all Israel at-him stone  
 そして全イスラエルは彼を石撃ちにし、そして彼は死んだ。 (1K.12:18)

ここでは人間も石も共にbare object と前置詞 b<sup>e</sup>- の双方を取ることができる。



しかし例文 14)における前置詞 b<sup>e</sup>- は動作の目標を指示しているが、12) のそれは具格的

意味で用いられている。また例文 13) は二重目的語を取る動詞の例として取り上げられることがあるが<sup>11)</sup>、この場合の石の表現 (ø -NP<sub>2</sub>) は文末で無限定の場合に限られ、通常の目的語というよりは、やはり一種副詞的 (あるいは具格的) 用法に近いと見た方がよいかもしい。よって少なくともここでは bare object と前置詞句の交代の例として、人間の表現だけを取り上げることにする。しかし、上述の動詞にならって仮に例文 12) と 13) の構文での動作を人間を直接の動作対象としてそれを石で撃つ意味とし、14) での動作を石を直接の動作対象としてそれを相手に向かって投げつける意味とした場合、両構文の表す状況はAktionsart等の観点からかなり一貫した相違のあることが予想されるが、実際にはほとんど区別なく用いられているようである<sup>12)</sup>。

## 6. まとめ

以上、いくつかの動作動詞について、bare object と前置詞句が交代しているとみなしうる例を検討してきた。個々の動詞毎にまとめると次のようになる。(ここでは対立を明示的に表すために、bare object の中でも特に 'et句を重点的に取り上げてある。)

動詞 — 目的語	動作対象	意味
1. 'āḥaz { 'et 句 Prep句	人物、物体 (総体的) 人物、物体 (局所的)	捕らえる、支える 直接手でつかむ
2. tāḥās { 'et 句 Prep句	人物、都市等 人物、物体	身柄を拘束する 直接手でつかむ
3. rāḍaḥ { 'et 句 Prep句	主に人物 主に人物	追跡する、討伐する 追跡する
4. 'ākal { 'et 句 Prep句	主に食物 主に食物	食べる 食らいつく、分け前にあがる
5. rāḡam { 'et 句 Prep句	人物 人物	石撃ちにする 石撃ちにする

どの動詞も人物を目的語として取ることができるが (但し rāḡam は人物のみ)、このうち 'ākal と rāḡam においては、たとえ人物が目的語であっても、その使い分けに対象の自律性が関与しているとはみなせず、物体と同様に人物を処理する (食らう、石で撃つ等) 意味で用いられているようである。一方 rāḍaḥ の場合は、対象を討伐するか、単に追跡するかによって目的語の形態が異なるが、これは対象への影響の到達の有無だけでなく、自律性に基づく対象そのものの性質の違いが関与しているとみられる。一方 'āḥaz と tāḥās の場合には、動作が全体を対象としているか部分を対象としているかによってそれぞれ別

の形態が用いられた。（'ākalも同様。）このうち'āḥazでは対象の一部が特定化されていたのに対し（「～の口髭をつかむ」等）tāpaśの場合にはそのような特定化はなされていないようである。また行為の具体性の有無もいくつかの動詞においては関与的であるとみられる。

一方、今回扱ったこれら5つの動詞のうち、rāgamに関してだけは両構文間の差異は不明瞭であった。これは、rāgamの基本義がすでに対象に直接の影響を及ぼす意味を含んでいるため、両構文間の差異が中和してしまっているものとも考えられるが、とにかく統語論的差異をそのまま意味論的差異へとスライドさせて一対一対応のように考えることが動詞によっては危険であることがこの例からわかる。

今回の考察自体は拙論(1995)の結論を修正するものではないが、それでも文全体の意味と動作対象の取る形態との対応において関与的な特徴は、動詞ごとにまちまちであることが明らかとなった。しかし少なくとも動作動詞に関しては、(1)対象に対する影響が全体的であるか部分的であるか、(2)動作の影響の到達の有無、(3)対象の自律性の有無、(4)具体的動作であるか抽象性の高い動作であるか、などの特性が目的語の選択に関与的である可能性が明らかとなったように思われる。（無論それ以外の特性に関与していることもありうる。）よって、目的語の形態を扱う際には、名詞句の特性だけでなく、つねに述語との関係を考慮した上での検討を進める必要がある。

#### 注

- \*. 本稿は、『吉川守先生御退官記念言語学論文集』（溪水社）に掲載された拙論(1995)を補足するものであるため、同じタイトルでパート2とした。よって、拙論(1995)の方のタイトルには「パート1」の表示が欠けていることを念のため申し添える。
1. Muraoka, T. (1979). "On Verb Complementation in Biblical Hebrew." *Vetus Testamentum*. Vol. 29. p. 434.
  2. Muraoka (1979) は、これを 'prepositional object' と呼んで 'bare object' と区別して用いている。本稿ではこの二つを包括するものとして「目的語」という呼称を使用しているため、通常とは若干異なる意味であることに注意する必要がある。この問題に関しては Waltke & O'Connor (1990) 10.2 も参照のこと。
  3. 動作対象として用いられる前置詞句は、場合によって副詞的語句との区別が難しいことも十分考えられる。今回具体的な動作を指示する動詞に対象を絞ったのは、解釈から曖昧さをできるだけ排除しておく必要性からでもある。抽象的な意味の動詞や、場合により両様に用いられうる動詞における目的語の分布も興味ある問題である。
  4. 三上 (1995). 「古典ヘブライ語の動作動詞における目的語表現についての一考察」『吉川守先生御退官記念言語学論文集』 pp. 310 ~ 313.
  5. 例えば tōp<sup>e</sup>śē ḥārābōt（つかむ者・剣の=剣を取る者）のようなものである。この



場合分詞は行為者名詞として用いられている。なお、ヘブライ語ではA of Bという所有関係を表す場合、前置詞を介入させずABの順で名詞を並べる。そして前置される被修飾名詞Aの方が、主に母音の弱化や語末音の切除などの手段により形態を変化させる一方、後続する修飾語句Bは形態を変化させない。(属格語尾はヘブライ語には存在しない。) この場合 *tōp<sup>e</sup>šē* は後続する修飾名詞がないと *tōp<sup>e</sup>šim* という形になる。

6. 代名詞を目的語としてとる場合はここにあげていない。この問題に関しては Muraoka (1979). を参照のこと。
7. 前者の 'et句の場合も、拘束されている具体的状況をこの文だけからは知ることができない点、'āhazとの平行性がみられる。
8. このように、対象となる名詞句固有の特性(固有名詞、人間名詞、動物名詞、無生物等)によって対象の自律性が一義的に決まるわけではないことに注意する必要がある。Comrie(1989)〔日本語版はコムリー(1992)〕によれば、ある出来事に対する名詞句の制御(control)の度合いは、名詞句の特性によって一義的に決まるものではなく、述語との関係によって決まる。詳細はコムリー(1992). pp. 59~64, 及びpp. 199 ~214 を参照のこと。
9. 三上(1995). pp. 313 ~315.
10. *sāqal* は、ほぼ同じ意味(石撃ちにする)の動詞であるが、専ら人物を目的語として取る。例文 12)と同じ構文である。

a) *ūs<sup>e</sup>qaltem*                      *'ōtām*      *bā' āhānīm wāmētū*

and-stone(2.pl.m.) Acc-them by-stones

そしてお前たちは彼らを石で撃ち、そして彼らは死ぬ。 (Dt.22:24)

11. この 13)の例については、Gesenius-Kautzsch-Cowley(1910). p. 370., Jouion-Muraoka(1991). p. 459. §127. 1. や、Waltke & O'Connor(1990). pp. 173~177. 10. 2.3.なども参照のこと。

12. 英語の I hit him. と I hit at him. の二文を比べてみた場合、前者は単に彼を叩いた意味であるが、後者は彼をめがけて叩く動作を行った意味であり、実際に命中したかどうかについては言及していない。(そのため実際に叩いた場合でも、当たらなかった場合でも使える。) 一方、後者は相手をめがけて行う動作であるから当然意志性があるが、前者については意志があるかどうかについては定かではない。よって両構文間においては、動作の影響の到達と、意志性の二つの点において差があることになる。この問題に関しては角田(1991). p.81.ff. 5.7. を参照のこと。

しかし、この点をふまえた上で *rāgam* の文をみると、動作の意志性だけでなく、動作の影響の到達に関しても両構文間でほとんど差がない。

b) *wayyirg<sup>e</sup>mū kol yiśrā' ēl bō*                      *'eben wayyāmōt (=14)*

and-stoned all Israel at-him stone

そして前イスラエルは彼を石撃ちにし、そして彼は死んだ。(1K.12:18)  
一方 'et句で動作が到達しない例があれば明らかな反例となるが、そのような例は存在しない。

c) *w<sup>e</sup>rāg<sup>e</sup>mû*      *'ôlāk*    *bā' āben*  
and-stone(3.pl.) Acc-you by-stone

そして彼らはお前を石で撃ち、(Ez.16:40)

新共同訳聖書はこの部分を「石を投げ」とだけ訳し、殺す意味を含意させない表現にしているものの、文脈を見ても撃ち殺す意味が本当に含意されていないのかどうか、必ずしも明らかではない。よって、この動詞に関する限り、動作の影響の到達の有無は非関与的であると言わざるをえない。

#### 参考文献

- Brown, F., S. R. Driver & C. A. Briggs(1907). *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*. Clarendon. Oxford.
- Comrie, B.(1989). *Language Universals and Linguistic Typology. Syntax and Morphology*. 2nd. ed., Basil Blackwell. Oxford. [本文中の引用は、松本克己・山本秀樹共訳(1992)「言語普遍性と言語類型論」(ひつじ書房)による。]
- Even-Shoshan, A.(1993). *A New Concordance of the Bible*. Kiryat-Sefer Publishing House.
- Gesenius, W.(1910). *Gesenius' Hebrew Grammar*. edited by E. Kautzsch. translated by A. E. Cowley. Clarendon. Oxford.
- Jouön, P. & T. Muraoka(1991). *A Grammar of Biblical Hebrew*. subsidia biblica 14/II., Editrice Pontificio Istituto Biblico. Roma.
- 三上宗一(1995). 「古典ヘブライの動作動詞における目的語表現についての一考察」『吉川守先生御退官記念言語学論文集』溪水社 pp. 308~321.
- Muraoka, T.(1979). "On Verb Complementation in Biblical Hebrew." *Vetus Testamentum*. Vol. 29. pp. 425 ~435.
- 聖書 新共同訳(1988). 日本聖書協会
- 角田太作(1991). 「世界の言語と日本語」くろしお出版
- Waltke, B. K. & M. O'Connor(1990). *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax*. Eisenbraun. Winona Lake.